
US アンリミテッド・ストラトス

みぞがみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

US アンリミテッド・ストラトス

【Nコード】

N8928Y

【作者名】

みぞがみ

【あらすじ】

IS、正式名称インフィニット・ストラトス。本来女性にしか扱えないISを扱える男が二人現れた。一人はIS適正ランクBの織斑一夏。もう一人はDランクの桐原秋二。栄光の道を歩む織斑一夏と違い、苦難の道を歩む桐原秋二はその果てにたどりつけるのか。今、舞台の幕が上がる。

この作品はArcadiaとじファンに投稿されている観光様の『一夏以外がISに乗ったらこうなるだろ、普通。』に影響され、許可を得て書かせていただいております。

1 - 1 (前書き)

この物語はフィクションです。
実在する人物、団体、国家などとは一切関係がありません。

狭い。その部屋はまずそんな印象を抱かせる。

ワンルームの賃貸アパートの一室、十六平方メートルのその部屋には、タンスやプラスチック製の収納棚、散らかった絵本やおもちゃなどで、かろうじて布団が一枚敷けるスペースしか残っていないかった。

「あなただけはしっかりと、健やかに育てて見せるから」

そんな部屋の中で、二十代後半に見える女が、小さな赤ん坊の頭をなでながら呟いた。精彩を欠いた様子から、この暮らしも彼女に大きな負担を強い、苦しいことがうかがえる。もしかすると、父親がいないのかもしれない。しかし、彼女の表情には子供に対する愛情がしっかりと浮かんでいた。

不意に、赤ん坊の目が開き、彼女にじやれついた。どうやら少しなでる力が強く、起こしてしまったようだ。彼女はゴメンゴメンとあやしながらも、そんな仕草も愛しいようで、口元の笑みを強めると再びゆっくりと始めた。

「あなたには苦労させるかもしれないわ・・・でも、強く、強く育て・・・」

不安を打ち消すように祈ると、息子が再び眠るのを確認した後、彼女も目を閉じ眠りに就いた。残されたのは静かな暗闇と晩秋の寒さだけだった。

桐原秋二は高校の予習テキストから顔をあげると、息抜きにテレビをつけた。ここ最近ニュースは同じことしか報道していない。今日もそれは同じらしく、どのテレビ局に変えてもタイトルは“男のIS操縦者現る”だ。

IS、正式名称「インフイニット・ストラトス」。宇宙空間での活動を想定し開発されたマルチフォーム・スーツ。“すべての現行兵器を圧倒する力”を持つがゆえに、当初の製作者の意図とは別に、宇宙進出は一向に進まず兵器へと転用された。しかし、女性以外に使用できないという致命的欠陥を抱えている。

このことからすると確かに大きなトピックだが、動かした者が織おり斑むら一夏いちかという名であることのみを、壊れたラジオのように二週間も流し続けるのはおかしい。おそらく政府の指示であろう。ISが発表されてからというもの、女尊男卑の考えがゆつくりと広まっている。特に五年前、一般に第一回目のモンドグロツソと呼ばれるISの世界大会が放映されてからは目を見張るものがある。来年の第三回モンドグロツソでさらにその傾向が強くなるかもしれない。来年には衆議院議員総選挙もあるし、男性主体の政党や男性の政治家が焦るのはわかる。しかしこの程度で女尊男卑が収まるわけがないと秋二は冷めた頭で考えていた。

（ただ女尊男卑の尻馬に乗っただけの女たちは新しいアイドルが生まれたくらいにしか考えないだろうし、ISの軍事的な強さを理解しているものならそれなりの強さを見せなければならぬ。それこそモンドグロツソで優勝するぐらいの）

「秋二、政府から手紙が来とるぞ！」

と、そこまで考えたところで秋二は祖父に呼ばれたために思考を止めた。現在桐原秋二に両親はいない。母親は今から八年前に死んだ。死因は交通事故だ。女手一つ、それも正社員ではなくパートやアルバイトで養うのはとても大変だったのだろう、過労のためフラフラと道路に飛び出し、車に轢かれた。虫の知らせでもあったのか、死後に家から遺書が見つかった。

遺書には高校進学のために貯金してある口座の暗証番号と、これま

で苦勞をかけたことについての謝罪文、けんか別れした両親へのメッセージがしたためてあった。父親については何も書いてなかったが、父親の顔も知らない秋二はそのことに何も思わなかった。ただ秋二は遺書の文面を初めて理解したとき、これから一緒にいてくれないことについての謝罪が書いてなかったことに、ヤケに腹が立ったことと、二度目に読んだとき、そのことが書いてないことに「なんだか母さんらしいや」と思ったことが印象に残っている。

「わかった。今行く、じいちゃん」

はじめてこの家に来た時、「どうしてママを助けてくれなかった！」「とわめき散らす秋二を泣きながらやさしく受け止めてくれた祖父母に、今では感謝している。だから秋二は、最近耳が悪くなってきた祖父に元氣よく返事をする、テレビを消して少し急ぎ足で部屋を出て行った。

「ほら、これじゃこれ。たぶん内容はあれじゃろ、あれ。なんつうたか、学、がく」

「学術理解向上のための第二次国民適性調査。物忘れも激しくなってきた？」

「そうかもしれん」

秋二の祖父、桐原源蔵きりはらげんぞうは肩をすくめると投げやりに答えた。

桐原源蔵は今年で七十一歳になる。去年の男の平均寿命は七十九歳なので、そろそろ心配になってくる。そんなことを言うと、「まだまだ現役！」の言葉とともに拳が飛んでくる。これがなかなか侮れなくて、結構痛いのだが、秋二はそれが元氣の証のようで内心喜んでいる。いや、秋二は断じてMではない。断じて。

「それにしても、東京中探して反応する人が彼を除いていないんだから、諦めればいいのに。あくまで噂だけど、中国では二億人探して反応ゼロらしいからね」

実際のところ、秋二は第二次国民適性調査が無駄とは思っていなかったが、苦しい財政状況下でそれを行うことにより、源蔵の年金が減ることを危惧しそう言った。

「なに、そうなのか？そんなことテレビじゃやっくらんが」

「あくまでネット上の噂だよ。ソースもはっきりしないし」

「ほーん、それが本当なら日本じゃ無理かの。・・・ま、おまえはもう愛越学園に入学がきまつとるし、関係ないじゃろ」

秋二は今年十六歳で、私立愛越学園を受験した。愛越学園は自宅からあまり近くないが、偏差値は五十五程で合格判定はA、何より学園の卒業生の九割が学園法人の関連企業に就職するため、学費が安く、就職が安定しているからだ（就職率は九十三パーセント程で、五パーセントほどが進学する）。

さらには地域密着型の経営方針で、ある日突然僻地に飛ばされることもないし、厚い社員層によって男性蔑視の女性や、逆に女性蔑視の男性の居る企業や個人に対応する体制をしているので、個人の希望する職業環境で働ける。秋二としては、養ってくれている源蔵たちに引け目を感じていたし、楽をしてもらいたいので、愛越学園はまさに理想と言えた。

「いや、そうなんだけど、第二国適は厳密な処罰はないけど強制なんだ。無駄かもしれないけど、別に一日ぐらいどってことないし。指定の日にもないから行くつもりだけど」

「まあ、指定の日っていつ？」

今まで台所で夕食の支度をしていた祖母の律子が現れた。どうやらずっと聞こえていたらしい。

「今週の土曜日。二時からだって」

「そうですか。がんばってきてくださいね」

律子はニッコリと笑いながら励ましの言葉をかけた。

学術理解向上のための第二次国民適性調査、通称第二国適は世界で唯一ISを扱える男の出現によって生まれた。簡単に言ってしまうと、二人目のISを扱える男を探そうということだ。第二国適の前身、第一国適は東京都に住む十歳から二十歳の男性全員にIS適性検査を受けさせると言ったものであったが（第一国適、第二国適ともに罰則がないため全員は検査を受けていないだろうが）、適性を持つものが皆無であったため、調査範囲を広め神奈川・埼玉県で再調査を行うことになったのだ。

もちろん、IS適性検査でがんばれば結果が良くなるなんてことはない。そうであれば、今の女尊男卑という考えなど生まれなかつたはずだ。母さんの少し天然な所は赤ちゃん譲りなんだなど、心の中で苦笑を浮かべながらも秋二は、

「うん、がんばってくるよ」

とそのことを顔に出さず明るい笑みで答えた。

秋二は現在、第二国適の会場にいた。第二国適はたいがい公共施設の一室を借りつけて行く。長つたらしい名前のこの多目的ホールは、とても複雑な構造をしていて、事前に内部の地図を持っていなければ確実に迷ってしまい、迷路と言われても納得できてしまうほどだ。そんな受験のときにもお世話になった多目的ホールを、秋二は右手に広げた地図と照らし合わせ、案内ぐらい用意しておけと思いがら慎重に進んでいった。

（ここか？）

秋二は一面ガラス張りの廊下を抜けた先にある一室の前で止まった。やはり迷う人が多かったのか、扉にはでかかど第二国民適性調査会場と書かれた紙が張り付けてあった。

効率が悪いだとか、めんどろくさいだとか、心の中で愚痴をはきつ

つ秋二はゆつくりとドアを開けた。

「あー、君、検査生だよ。はい、向こうで着替えて。あつとゴメン、まず向こうの受付に第二次国民適性調査案内の封筒に同封された検査カードを提出して。その後のことはまた受付で説明されるから」

「はい。わかりました」

部屋に入ると、入口付近にいた女性が一息にまくしたててきた。

簡潔に答えると、秋二は財布から同封されていたクレジットカード大の検査カードを取り出し、受付へと向かっていった。

まだ一時半なためか、秋二のほかには一人しか並んでいない受付でカードをリードしてもらい（技術の発展により、磁気カードは大変安価かつ比較的量の少ない情報を整理するのに便利になったため、こういう場面ではよく使われるようになった）、指示に従ってへソ出しルックのISスーツに不満を覚えながらも着替え、奇妙な物体と対面した。

それを見て抱いた最初の感想は、“できそこないの鎧”だった。

人の形に似ていて、見方によっては忠誠を誓う主にひざまずく武士のようだった。しかし、秋二にはどうしてもそのようには見えなかった。ひざまずいてなお威圧感を与える大きさと、どのような攻撃も跳ね返しそうな厚い装甲は、確かに歴戦の武士然としたものかもしれない。だが、芯がない。どんな重い武器でも使いこなせるような太い腕部、どんな悪路でも駆け抜けられそうな脚部、そしてポツカリと空いた胴体。欠けた一つの部位で、それはとても頼りないもののように見えたのだ。

秋二にはこんなものが政治、軍事の切り札とは思えなかった。

「では機体に触れてください」

「っはい。わかりました」

どうやら少し呆けていたようだ。軽く頭を振り、意識を入れ替え、ISの肩のように見える浮遊パーツに手を置いた。

「つつ!?」

キンツという金属質の音と、ザザツという二昔前の壊れかけたブラウン管テレビのノイズのような音が、強制的に頭の中に響いてくる。そして、意識に直接流れ込んでくるノイズ交じりのおびただしい情報の数々。

基本動作、性能、特性、現在の装備、行動範囲、アーマー残量。さらに酷くなるノイズ。

可能な活動時間、センサー精度、レーダーレベル、出力限界。

「ああああああー!!!」

頭の中をかき回されるような情報の渦とノイズによる痛み、ISに触れていない左手で頭を押さえる。余裕がないせいなのか、本能的に今右手をISから離すと危険だと感じ取ったのか、右手を引こうとは考えられなかった。ジクジクとした強烈な痛みに目が見開かれ、叫びとともに体中から脂汗が吹き出る。

「どうしたの!?」

異変に気がついたのだろう、何人かの研究員とここまで案内してくれた少しきつめの女性が駆け寄ってくる。そんな様子を、強引にながれたセンサー越しに見たのを最後に、秋二は気を失った。膝から力が抜け、ISにもたれかかる。その時、ISが秋二を抱きしめるように微かに動いた。

「だいじょうぶ?」

秋二が目覚めて最初に見たものは、会場に着いたとき、最初に案内してくれた女性と数人の救急隊員、数々の医療器具だった。

「どうして?」

まだ頭が働いていないようで、今の状況を把握することはできな

った。思い出そうと試みるが、残念ながら、頭が鈍く疼くというこ
としかわからなかった。

「あなたはバスケットボール中に突然頭を押さえて倒れたの。覚え
てる？」

女性はそう言くと、秋二の手を取りながら秋二にしか聞こえないよ
うに囁いた。

「ここじゃまずいわ。病院に着いてから話します」

「そう、ですか・・・あの、水つてありますか？」

事情も気になったが、今は体にまわりつくような倦怠感をどうに
かしたかった。

そのことを聞いていた救急隊員から水の入ったコップを受け取る
とする。

「あ、君が気を失う時頭を押さえていたそうだから、上体を起こさ
ないで。私が飲ませますから。口をあけて」

胸に山岡と書かれたネームプレートをした人が、少しずつ水を口に
含ませるようにコップを傾ける。秋二は二口ほど水を飲むと、口を
閉じてもう必要ないことを訴えた。

その後も何人かが話していたようだが、秋二は考えることが億劫だ
ったので、目を閉じ再び眠りに就いた。

秋二が次に目を覚ましたとき、やたら白い景色が視界に入ってきた。
ゆっくりと体を起こそうとして、力が入らず諦める。きよるきよ
と周囲を見渡すと、窓を覆う薄い白のカーテンから漏れる光がまぶ
しくて目を細める。二の腕からチューブが伸びていて、点滴の袋に
つながっている。

そこまで確認したところでノックの音が聞こえた。

「どづ...ぞ」

何とか声が出たが、予想よりはるかに小さく、かすれた声だった。

入ってきたのは初めてみる女性だった。アップでまとめた髪とぴっちりしたスーツ、しゃんとした立ち姿がよく似合っている。

「桐原秋二さんですね。私は文部科学副大臣つき秘書、飛知和理恵ひちわりえと申します。あなたにはISについてのお話があります」

理恵はせかすように口早に言った。

「ISの・・・わかりました。お願いします」

秋二は疲れていて、正直、後にしてくれと言いたかったが、理恵の有無を言わさぬ視線と、何より今の自分の状況を思いなおし了解の意を伝えた。

「はい。では順番に申し上げます。まず、あなたはISの起動に成功しました」

「やっぱり、ですか」

秋二にはその予感があった。“IS”と聞いたときに、自分が知りえもしない情報が浮かんできたからだ。脳がはつきりしてくると、ISに触れた時のことが思い出される。信じがたいことだったが、疼くような頭痛が夢でなかったことを証明する。

「つきましては、桐原秋二様にISの日本登録簿を取得していただくための各種書類へのサインをお願いします」

ISとは、強力な兵器だ。少なくとも、政治や軍事に関わるものならそう認識している。当然、そのような力を保持するのなら責任の所在ははつきりさせておかねばならない。それがISの登録簿である。

「・・・ISに乗らないという選択肢は」

「残念ながら、それは許可できません。現在、国防力は第一にISをどれだけ所有しているか、第二にISの技術力をどれだけ所持しているか、第三にISを使いこなせる操縦者がどれだけ存在するかによって決定します。覚えていますか？白騎士事件を」

十年前、篠ノ之束博士しののたはねが発表したISは、当初認められなかった。篠ノ之博士はISの発表を国際科学技術学会の名誉技術賞選定中に殴り込みをかけて行ったおこな。篠ノ之博士曰く、
「ハローみんな！こんなものよりも天才さんがすごい発明しちゃったんだよ、ブイブイ」
そう言つて篠ノ之博士は、ISの基礎スペックといくつかのパーツの実験結果だけを開示した。製造理論や研究で展開した順序など、開示されていない情報は多い。特にISの中心たるコアの情報は少なく、現在でもISのコアを作れるのは篠ノ之博士だけである。認められないのも当然というものだ。
しかし、現在では“ISはすべての現行兵器を圧倒する兵器”ということが認められている。それはひとえに白騎士事件があつたからだ。

日本を攻撃可能な各国のミサイル二千三百四十一発。それらが一斉にハッキングされ、制御不能に陥つたあげく日本に発射された。だが突如現れた白銀のISを纏つた一人の女性によって無力化された。その後も、各国が送り出した戦闘機二百七機、巡洋艦七隻、空母五隻、監視衛星八基を、公式的には一人の人命も奪うことなく破壊することによつて、ISは“究極の機動兵器”として一夜にして世界中の人々が知るところになつた。これが白騎士事件だ。

「国際的に大変だつたのにこういう言い方はおかしいかもしれません。僕が、僕は当時それどころではなかったたので、覚えていません。ですが、白騎士事件のことは知っています。何度も習いましたから」
秋二が六歳のとき母親が死んだ。十年前の五歳のとき、秋二は日に日にやつれていく母美咲のために気を使っていたし、精神の早熟が原因でいじめられてもいた。幼いころのことであるし、余裕もなかったたので、秋二は白騎士事件のことを覚えていなかった。

「・・・そう。当時は酷かったわ。日本は公式の軍隊が無かったからまだましだったけど、軍のある国、特にアメリカは酷いものだったわ。世界の軍事バランスが崩れ、いざという時防衛すらままならないんですから。・・・本当に多くの犠牲が出たわ」

理恵は、天井を見つめながらゆっくりと言った。あまりにも鮮烈で凄惨な記憶だったのか、今までの堅苦しい口調が崩れ、普段の調子が漏れていた。理恵はそのまま十秒ほど天井を見上げ、視線を秋二に戻した。

「現在の日本に余裕はありません。どうか、協力をお願いします」
「・・・」

理恵の真摯な願いに秋二はすぐに答えられなかった。

沈黙が場を制す。しばらくの間、二人は黙っていたが、唐突に理恵が切り出した。

「あなたが我々に協力してくれるのであれば、働きに応じて給金が出ます。最低月に百万からです。さらにあなたの保護者に要人保護プログラムを適用し、有事の際には優先的に対応されるようにします。いかがでしょうか？」

理恵の言葉が終ると再び沈黙が降りた。

確かに破格の条件に見える。中卒の秋二に最低でも月給百万出す企業はないだろうし（もちろんISに乗れない場合の話だ）、要人保護プログラムを適用することとは国家体制で源蔵や律子の面倒を見てもらえるということだ。しかし秋二は首をすぐに縦に振らず、思考にふけた。

（要人保護プログラムの対象になるということとはつまり国家の監視がつくということだ。

“二人目のISを操縦できる男が現れた”

このことは機密情報扱いされ、かん口令がしかれているだろう。しかし人の口に戸は立てられないし、第二国適の会場で何か異変が起

こつたことは国家権力であれば簡単にわかるはずだ。ISの登場により各国は少なからず失策を講じてしまった。これ幸いと現政権打倒に動きだす集団の中に無視できない女尊男卑を煽る団体もいる。そんな国家にとって二人目のISを操縦できる男はどのから手が出るほどほしい人材となりうる。最悪男がISを操縦できるとはならなくても、新技術の獲得ができればまた盛り返すことができるかもしれない。

となると、各国は俺を確保するために動きだすかもしれないし、家族を危険にさらすかもしれない。事態が穏やかに進行するかもしれないが、じいちゃんたちは住み慣れた日本で暮らしたいはずだ。仮にアメリカと契約することになったとして、じいちゃんたちは日本にいられるだろうか。

そもそも俺の考えは正しいのか？全ては俺の自意識過剰ということも……。いや、文部科学副大臣の秘書が動いているということは、文部科学副大臣から何らかの指示が出たということだ。自意識過剰というわけではないと思うが。それにさっきはISに乗らないことはできないと言った。みすみす他国に渡すほど愚かではないと思うから、もし断られた場合脅迫の材料でも揃っているのか？それならば今のうちに受けるという考え方も……)

秋二がしばらくの間考えて出した結論は、

(しよせん高校に入学前の俺が処理できる問題ではなかったな。俺がISを動かしてしまったという事実が覆らない以上、俺たちが厄介事に巻き込まれるのは必然というものだ。ならばせめてじいちゃんたちが日本で暮らせるよう取り計らってもらおう) というものだった。

それを見越したのか、立ち続けていた理恵が問う。

「答えを伺ってもよろしいでしょうか」

「はい。俺は日本人として、日本のIS操縦者になります」

「ありがとうございます」

秋二はその言葉に本当の感謝の気持ちがこもっていることが分かった。そして差し出された理恵の右手をまだ痺れの残る右手で握った。

東京都千代田区霞が関の文部科学省の一室で男女が一人ずつ向き合っていた。

「それで、秋二君の協力は得られたんだな？」

「はい、副大臣。今日のところはまだ疲労が残っているとのことで正式な契約書は後日改めて、ということになりましたが、彼が彼自身の意志で日本のIS登録籍を持つつもりであると証文を書いていただきました」

「それはよかった。で、実際のところ彼はISを動かせるのか？」

一人目のISを動かした男、織斑一夏は、ISを開発した篠ノ之博士と昔馴染みだ。正確に言えば、織斑一夏と篠ノ之博士の妹、篠ノ之しののけ篤が幼馴染であり、その関係からISの正式な発表と同時に失踪した篠ノ之博士とつながりがあった。また織斑一夏の姉、織斑千冬おりむらちひゆは篠ノ之博士と親友であり、IS適性はS（IS適性はS・A・B・C・Dで表され、Sに近いほどISを上手く扱える）で、五年前の第一回モンドグロツソの総合優勝者である。

つまり現在の研究機関では、織斑一夏にIS適性があるのは篠ノ之博士が干渉した結果という見解が強い。そんな中現れたのが、本人の証言では過去一度も篠ノ之博士に接触していない桐原秋二という少年だ。それゆえ文部科学副大臣、宍道和人ししどわかずとはISが反応したという報告がされても信じがたいという気持ちがぬぐい切れなかった。

「はい。研究者たちの報告では、彼は確かにIS適性Dランクが測

定されているそうです」

「Dランク？私は政治家とはいえ、文部科学副大臣だ。それなりのISについての報告書を読んでいるが、Dランクというのは聞いたことがないな」

「一応、IS適性Dランクというのは実在します。しかしそれはあくまで理論的にであって、現在までの女性のIS適性検査では発見されていません。織斑一夏も適性ランクはBです」

「なるほど、彼の価値がますます高まるな。どうせ情報は各国に開示しなければならんだ。彼の身柄だけでも確保するため、なるべく早くIS学園への入学手続きを完了させる」

ISの登場により、十年前に現行していた兵器は全てその性能に信頼をおけなくなり、それ故に世界の軍事バランスは崩壊した。開発者が日本人ということもあり、当時は日本がIS技術を独占的に保有していた。そのため、危機感を募らせた諸外国はIS運用協定（通称アラスカ条約）によって全世界にISの軍事利用の禁止が定められ、日本へは情報開示と研究のための超国家機関の設立、ISコアの分譲などが求められた。

日本はこの条約を結ばなければならなかった。もし断れば第三次世界大戦が勃発した。そうなれば食料と石油や石炭などのエネルギー源を他国からの輸入に頼る日本は必ず負ける（当時の日本はISコアこそ所持していたものの、試作機すら完成していなかった）。しかし、ISとは突如現れた全く新しい技術体系を必要とするもので、言ってしまうえば、途方もなく金がかかるものだった。そんなISの研究機関（後のIS学園）を設立するには莫大な金がかかり、その割に研究成果は全世界で共有するとあって、日本に大きな負担をかけるこの条約を締結した現在の政府に対する不満は高まるばかりであった（種々の専門家が条件を緩和できたと主張している）。

そういつた事情から、秋二の情報を日本は開示しなければならない。しかし、IS学園には特例事項が存在する。その一例として、

“ 本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする ”

というものがある。今の日本政府の外交担当ははっきり言って弱気すぎる。アメリカに桐原秋二の身柄を渡せと言われたら従いかねない。

“ アメリカが日本人の桐原秋二を研究することによって男でもISに乗れる技術を見つけた ” というのと、“ 日本が日本人の桐原秋二を研究することによって男でもISに乗れる技術を見つけた ” というのでは日本が受ける利益は段違いになる。そのため宍道は秋二をIS学園に速やかに入学させるつもりであった。

「しかしながら、問題があります。今年度のIS学園入学者の中に織斑一夏が存在するため、彼の所属することになる一年一組にはすでにドイツ、フランス、イギリスからの圧力がかかっています。二組には中国とイタリアから、四組はロシアから。残る三組は・・・例のアメリカの少女が・・・」

いくらIS学園に特例事項があつたとしても、完全に国の影響力を遮断するのは難しい。現状で各国に介入されている一、二、四組に秋二を編入させるのはためらわれる。

「彼女は確かに日本を嫌悪しているからな・・・。しかししかたあるまい。そのあたりは秋二君に耐えてもらおうとしよう。他に何か問題は？」

「現状では特にないかと」

「そうか。彼のことは編入が終わるまで機密事項だ。彼に接触する者は信用に足るものにしてくれ」

そう言うと、宍道は別の案件の処理を始めた。

こうして桐原秋二はIS学園に入学した。

1 - 1 (後書き)

という一話目なんだが、突っ込みどころが多すぎる。そもそも原作からして・・・(ry

突っ込みどころは無くしていきたいと思うので、誤字脱字、文法間違い、その他ご指摘があれば感想に書いていただければ嬉しいです。

「ここがあなたの通うことになるIS学園です」
広大な敷地を有するIS学園にふさわしい巨大な正門の前で、秋二はIS学園広報担当兼案内員から説明を受けていた。
IS学園の新年度が始まってすでに一週間ほどになる。なぜ入学が遅れたのかというと、当然のごとく秋二のことでもめたからだ。そもそもISとは男が扱えるものではなかった。よってISに関する条約の一部には、対象者が女性と明記してあるものが存在する。

例えば、IS学園への入学条件は、“IS運用協定参加国の国籍を持つ者”なので、男でも入学資格はある。一方IS運用協定の定めるIS操縦者の定義とは、“ISを常時もしくは定期的、一時的に使用する予定のある女性、または使用している女性”となっていて、IS操縦者はISの持つ力の大きさのためにIS操縦者登録をしなければならぬ。

つまり男がIS学園に入学する場合、ISを使用する予定があるとすることであるが、IS操縦者にはならない。しかしIS操縦者登録をしなくても良いということにはならない。

秋二たちがIS学園に入学するにあたってこのような問題が多々浮上したのである。

秋二の場合これらの問題に加え、日本政府が特例として日本の登録籍を作ってしまったので、国際問題となり入学が遅れたのである。

なお、秋二の扱いはIS学園に在学中は日本の登録籍を持ち、卒業後は国際IS委員会の登録籍を持つということに決定した。決定内容から考えて、むしろこの程度の遅れですんだのは奇跡的と言える。

「これから本校舎一階総合事務受付に向かいます。本校舎にはあな
たの所属する一年三組やISの模擬戦などをするメインアリーナの
使用許可を得るための事務受付などがあり、これから頻繁に使用す
ることとなりますので、しっかりと場所を覚えておいてください。
その後、グラウンドやメインアリーナの案内になります」

「はい、わかりました」

秋二は答えると、ゆっくりと歩き出した案内員の後について行った。
二十分ほど歩いたであろうか、秋二たちはまだ目的地の本校舎につ
いていなかった。さすがに痺れを切らした秋二が案内員に話しかけ
た。

「あの、岡田さん、でしたっけ？まだ本校舎には着かないんですか
？」

「・・・学園が有するISは百四十六機。そのうち生徒の訓練機用
が九十機前後で、残りが各国の研究用です（ISコアは篠ノ之博士
しか作れず、現存するのは四百六十七個で、これ以上作るつもりは
ないと博士は宣言している。またISは一機所持するだけでも莫大
な維持費、研究費がかかるため、コアは各国のGDPをもとにして
割り振られている）。それだけのISの実験データを摂るためにも、
IS学園の敷地は広く取られ、周りを海で囲まれています。陸地の
総面積はおよそ百二十平方キロメートル、東京ドーム約二千五百七
十個分にもなります。これでも足りないのですが、残念ながら日本
の経済的にはこれが限界です」

案内員の岡田も疲れているのが言葉の端々から伝わってきた。言い
方もどことなく投げやりな感じがする。岡田のまとう陰鬱な雰囲気
に、秋二の顔が引きつった。

「そ、そうですね。・・・もしかしてグラウンドやアリーナに行く
ときも徒歩なんですか？」

「残念ながら日本の経済的にはこれが限界です」

IS学園は機密の塊だ。よって学園の管理していない車やそれに準ずるものなど、持ち込みは固く禁じられている。そして学園の方針として、車などにかける金があれば研究費に回す。その結果よほどのVIPでなければそう言ったものを使うことなどできない。先ほどと同じ岡田の言葉に、秋二も気が重くなった。しかし現実から目を背けてもしょうがないので、二人はとぼとぼと目的地までの長い道のりを歩いて行った。

「はい、それでは以上で手続きは完了です。ようこそIS学園へ」
「・・・ふう」

慣れないこまごまとした手続きも終わり、秋二は疲れを感じさせるため息をついた。秋二がこの学園に来た時には真上にあつた太陽も、今ではだいぶ傾いている。明日から学校が始まるので、案内はここまでにして今日はもう休みたいというのが秋二の本心だった。

「学園内重要規約書はもう読まれましたか？」

一瞬まだ解放されないのか、と秋二は顔を歪めたが、答えないわけにはいかないので、出来るだけ明るい声で、

「はい、読みました。ただでさえ一週間遅れですから、時間だけはありましたので」と答えた。

時間があつたというのは嘘だ。普通IS学園に通う生徒は、小学校あたりから専門の学習を始める。いくら小、中学時代から奨学金を得るために勤勉であつた秋二といえども、それらの生徒には今までため込んできた知識量では足元にも及ばない。この学園に入学が決まってから今までの一カ月と数日程度では、学園内重要規約書のおよその内容と、必読であるISに関する参考書の何ページあたり何が載っていたかぐらいしか覚えることはできなかった。

「けっこうです。それでは引き続き学園内の案内を受けてください」

「ありがとございました。またお願いします岡田さん」
秋二はやはり案内が続くことに気を落としてつつ、岡田の指示を仰いだ。

「・・・そうですね、ではまず第三アリーナに行きましょう。面白いものが見られると思います」

岡田は少し考えた後、いいことでも思い出したのか、輝く笑顔を見せた。

「何があるんですか？」

岡田の言葉に秋二も興味をひかれたのか、声が自然と弾んでいた。

「行けばわかるわよ。休憩にもなるしね」

(普段からそうなのか、自分が子供だからなのか、岡田さんは地が出すぎるな)

これで広報担当や案内員が務まるのかと、割と本気で心配しながら秋二は岡田について第三アリーナへと向かった。

第三アリーナに到着すると、そこでは今まさにISの模擬戦が始まるところであった。

「青いISを纏った少女の方がイギリスの代表候補生、セシリア・オルコットとその専用機青い滴ブルー・ティアーズです。白いISを纏った少年の方が今話題の一人目のISを扱える男、織斑一夏とその専用機白式グッドです。二人は一年一組のクラス代表をかけて戦うようですね」

岡田は第三アリーナの管制室から借りてきた携帯端末を読むと、解説しだした。

クラス代表とは、その名の通り一学年に四クラスある学級のリーダーのことで、いわゆる学級委員や室長のことだ。クラス代表は春先にあるクラスの団結を高めたり、本格的なIS学習が始まる前のス

ターゲット時点での実力指標を作ったりするために開かれるクラス代表戦^{ツチ}に出場する。生徒のやる気を引き出すためにクラス代表戦の一位クラスには優勝賞品として、学食デザート^{リクマ}の半年フリーパスが配られる。それに加えあくまで極秘裏にだが、ISの貸し出し優先権が与えられる（貸し出し優先権が極秘なのは、優勝できなかったクラスに在籍する生徒の国がうるさいからだ）。

「いかがですか？自分以外の専用機持ちを生で観た感想は」
岡田はからかうような声音で秋二に尋ねると、様子を窺った。

しかし秋二はそんなことにも気付かずに、ただ二機のISを眺めていた。

「いや、凄いです。何と言うかこう、そう、俺なんかと比べてずっと動きが滑らかで、織斑君なんて俺と大してIS搭乗時間が変わらないはずなのに、動かし方をもう理解してるようで・・・何て言うか、凄い」

秋二が普段目上の人を使う僕という一人称が崩れていることから、秋二が本当に、心の底から感心していることが簡単にわかった。秋二は倒れた後、ISに乗れることの確認のためにもう一度ISに触れた。その時は倒れたりしなかったものの、歩行、浮遊だけで精いっぱいというひどい有様だった。だからこそ、秋二は二人のレベルの高さに純粹に驚かされた。

岡田は秋二の境遇を思い出すと、必死に表情を殺した。笑みを貼り付けようとしても歪んでしまうと思ったからだ。幸い、秋二は二人に夢中になっていて気付かなかっただらしく、岡田は安堵した。二人が黙ってアリーナでにらみ合う二人を見てみると、ようやく戦いが始まるようで、セシリアのIS、ブルー・ティアーズがレーザーを放った。

放たれたレーザーの弾丸が一夏の白式に迫る。とっさにガード体制

をとるが、どうやら一夏はIS戦闘に慣れていないようで、それはきこちない動きだった。しかしISが究極兵器と言われる理由の一つ、バリアーのおかげか、白式の左肩部の装甲が吹き飛ばすだけにならなかった。

秋二はその光景を見て内心胸をなでおろした。ISにバリアーがある限り、傷つかなくて済むことと、さすがにIS搭乗時間数十分の素人では何もかも完璧にできはしないことが証明されたからだ。

（さつきは二人とも素晴らしい動きだと思ったが、一夏君とセシリアさんの動きには歴然とした差がある。搭乗時間しだいでは俺にも戦い方がありそうだ）

現在ISは戦争では使わないよう協定が結ばれている。そこでISはスポーツ感覚で使われるようになった（もちろんISが最強の兵器であることに変わりはなく、各国はその国の軍事力を示すために全力で開発にあたっている）。スポーツには当然“ルール”がある。ISでの戦闘では相手のシールドエネルギーをゼロにした方の勝ちというのがそれに当たる。

ISバトルでは搭乗者の命が第一に考えられている。IS全体はシールドバリアーで守られ、シールドバリアーを貫通する攻撃が行われた場合、搭乗者の命が守られるよう効率度外視の出力全開でのバリアー、“絶対防御”が発動する。

いくらこのことを知っていても、目の前にレーザーが迫ってくれば恐怖は避けられない。秋二は実戦を行う前に生の戦闘の様子を観戦できたことに感謝した。

アリーナにはブルー・ティアーズのレーザーが雨の如く降り注いでいる。しかもそれは一夏の回避先を読んで攻撃先が構築されているようで、少しずつ回避が厳しくなってきた白式は一発、二発と被弾し、確実にエネルギーが削られていった。

そこまでやられたところで、白式が刃渡り百六十センチほどの刀に

似た近接ブレードを展開した。反撃を警戒したのか、ブルー・ティ
アーズが威嚇射撃を放ち白式の勢いを止める。
間合いが開き、両者の動きが止まった。嵐の前の静けさというやつ
なのか、これからの激戦を予想させた。

「受けなさい、私の“ブルー・ティアーズ”を！」
わたくし

開放回線オープンチャネルで発せられたセシリアの言葉がアリーナのスピーカーから
流れる。と同時に、ブルー・ティアーズの装甲の一部が本体から切
り離され、勢いよく四機のビットが白式へと向かっていった。そし
て先行していた二機のビットからレーザーが放たれる。白式は上空
へと舞い上がることで回避に成功したが、今度は回り込んでいた一
機のビットにレーザーを打たれ、命中する。シールドを貫通し絶対
防御が発動したが、背中の装甲がはじけ白い粉塵を空にばらまいた。
「本来ブルー・ティアーズとはこのビットのこと。ここから私の
本気ですわ」

セシリアが高らかに宣言した通り、白式は空を機敏に動きまわる四
機のビットに翻弄され、近づけないどころか次々と攻撃を受けシー
ルドエナジーを減少させていく。

残念ながら、秋二には白式の勝機は見えなかった。

「あなたはこの戦いをどう見ますか？」

静かに試合を観戦していた岡田が突然秋二に話しかけた。

「どつつて言われましても・・・僕はまだ自分がどの程度ISを動
かせるかもわかりませんし、他の学生の試合も見た事ありません。
むしろこの試合が僕の基準となるんですが」

秋二は一瞬たりとも見逃すつもりはないのか、顔の向きを変えずに
答えた。

「俺ならこうするとか、あれが良くなかったとか、素人目線でいい
ので教えてください」

しかし岡田は引き下がらなかった。秋二が顔を向けると、今までに

見た笑顔や疲れた表情と違い、ヤケに真剣な顔つきをしていた。秋二は仕方なく試合中の二人を諦めて考えにふけた。

「・・・見た後だから言えることですが、戦いのはじまった直後から織斑君は失策をとっています」

秋二は最初は自信なさげに、しかしはつきりと言いきった。

「それはどうして？」

そこまではつきりと答えられると思っていなかったのか、岡田は少し驚きながら聞き返した。

「織斑君がどれぐらいあの専用機に乗っているのかは知りません。

ですが明らかにセシリアさんの方がISを上手く使いこなしています」

ISの搭乗時間とはISの操縦において重要な役割を持つ。

第一に慣れというものがある。

人間は空を飛ぶようにできていないし、ISを使うようにもできていない。

いくらISがイメージインターフェイスを搭載していて、イメージすることで操縦できるとしても、ISで空を飛ぶイメージは辛い。さらには空中で剣を振ったり、銃を撃つたりすることなどが、地上でそれを行うのと違う感覚になるのは言うまでもないだろう。だから慣れというのは重要である。

第二にISは搭乗者のパーソナルデータに適應する。

十分よりも一時間、一時間よりも十時間、十時間よりも百時間、ISと触れ合った時間が長ければ長いほどISは自己のプログラムを搭乗者に最適化し（独自のフラグメントマップを構築するという）、素早い反応を可能とする。ISバトルはそのほとんどが高速戦闘だ。ゼロコンマ数秒の世界で直撃かどうかが決まり、それが勝敗を分けることも珍しくない。

第三にISは自己進化能力という驚くべき特性を持つ。

ISには意識に似たものがあり、戦闘経験を含む全ての経験を蓄積することで、IS自らが自身の形状や性能を大きく変化させる“フォームシフト形態移行”を行い、より進化した状態になる。現在専用機化したときにおこる一次移行、ファーストシフト原因のよくわからない二次移行と三次移行の三種のフォームシフトが観測されている。

いずれにせよ、搭乗時間にIS操縦者の力量は比例する。

「それに加えてセシリアさんは射撃攻撃を得意としているようですから、セシリアさんとビット四機の多重攻撃を回避しながらの射撃はおそらく不可能ですし、近接攻撃をしようにも懐に飛び込むのは至難の業でしょう。しかし試合開始当初、もしくはビットを展開しきる前であれば回避も比較的簡単になりますし、多少の被弾があっても懐に潜り込めます。そのままの位置関係を保てば自爆を恐れビットは使えないはずです。移動速度が同程度であることから、この作戦は可能だと僕は考えます。もっとも、セシリアさんの近接戦闘の実力がわからない以上、なんとも言えませんが」

秋二は精いっぱい自分がああ青い機体と向き合っているのを想定して考えた結論を語った。

「それは各国の代表候補生に与えられる専用機を甘く見ています」
しかし岡田の返答はきびしいものだった。

「どうしてそう思ったんですか？」
今度は逆に秋二が質問した。

「ブルー・ティアーズはイギリスの開発した特殊兵装で国家機密です。私が言うことはできません。ですが織斑君が近接戦闘を狙う限り、その時が来るかもしれません。答えられずすみません・・・」
秋二に肩入れしすぎたと思ったのか、岡田の纏う雰囲気は堅くなる。
「いえ、岡田さんがIS学園に所属する以上しかたのないことです。」

むしろ認識が甘いと教えてくださってありがとうございました」
雰囲気を感じ取った秋二も気を引き締めなおし、再びアリーナの二人に注目した。

開始から二十七分、ほとんど無傷のブルー・ティアーズと違い、白式は所々の装甲が砕け、白い塗装もはがれていた。

「このブルー・ティアーズを前にして、初見でこうまで耐えたのはあなたが初めてですわね」
スピーカーがアリーナを振るわせる。

「ではファイナレとまいりますよう」
その言葉とともに四機のビットが二組に分かれ、直線的な動きで白式を追い込んでいく。

「左足、いただきますわ」

白式の左脚部は五分ほど前に直撃を受け、装甲がなくなっていた。
今その部分に直撃を食らえば必ず絶対防御が発動し、大きくシールドエネルギーを失う。見るからにぼろぼろであることが分かる白式だ。絶対防御が発動すれば決着がつくかもしれない。

だがここで一夏が意地を見せた。

「ぜあああつ！」

追いつめられた白式が、気合とともに勢いよくブルー・ティアーズに突っ込み、ブルー・ティアーズの構えるライフルの向きを体当たりで無理やりに変えた。一瞬遅れて発射された弾丸はむなしく空に飲み込まれていく。

「無駄なあがきを」

ブルー・ティアーズは白式と距離をとると、ビットを操作した。

「わかった！」

一夏が叫ぶ。

白式が穿たれる二本のレーザーをかくぐり、後方で指示を待っていたビットにブレードを振る。鋭利な刃先が金属に沈み込んでいく

重い手ごたえを感じながら、白式は刀を振り切った。残心を持ちつつ、急いで断面から青い稲妻を放つ二つの金属片から離れる。そしてその一秒後、それらは爆発し、破片を地面にまき散らした。

「この兵器は毎回おまえが命令を送らないと動かない！しかも白式は軌道を読んでいたのか、後ろを振り向き狙いを定めていたビットの後部推進機^{スラスター}を切り落とした。白式はビットが落ちていくのを確認した後、ブルー・ティアーズに向き直り、

「その時、お前はそれ以外の攻撃をできない。制御に意識を集中させているからだ。そうだろ？」

先ほどの続きを口にした。

（しかもあれは必ず俺の反応が一番遠い角度を狙ってくる。ISの全方位視界接続は完璧。けれど人間が直接“見る”ことができずにコンマ数秒の遅れが生じる、真後ろや真下なんかをセシリアは突いてくる。なら逆にどこに飛んでくるか自分で誘導できる。やれる。集中さえすれば！）

白式がブルー・ティアーズを間合いにとらえようと前進する。ブルー・ティアーズはそうはさせまいとビットで白式の上下を押さえ、時間差で攻撃を仕掛けた。白式は真下のビットを袈裟がけに叩き切ると、こんどは真上のビットに迫り、回し蹴りを放ち吹き飛ばした。さらに回転を続け体勢を立て直すと、ブルー・ティアーズに切りかかる。

「かかりましたわね。おあいにく様、ブルー・ティアーズは六機あつてよ！」

セシリアの腰部から広がるスカート状のアーマーが動き、ブルー・ティアーズからミサイルが発射された。白式は回避しようとして上空に退避するが、間に合わずに爆発の白い炎に包まれた。

アリーナと観客席を隔てる遮断シールドを超えて体の芯を揺さぶる

ような重低音が響く。耳の奥で振動がいつまでも残っていて、なかなか消えない。もうもうと立ち込める黒煙がゆっくりと広がっている。その中に純白の人影が見える。白式だ。

先ほどまでの実体ダメージがすべて消え、より洗練された形に変化している。もともとの角ばった凹凸はなくなり、滑らかな曲線とシヤープなラインが目立つ。さらにその装甲は薄ぼんやりと柔らかい白光を放っている。右手に持つ近接ブレードも、普通の日本刀のようなものから反りの強い太刀に近い刀身になり、鎬しのぎに溝が生まれそこから緑色の光が漏れ出ている。

雪片ゆきひら。かつて第一回モンドグロッソで総合優勝を果たした織斑千冬の専用IS装備の名称。それが白式の手握られていた。

「まさかファーストシフト一次移行！？あ、あなた今まで初期設定だけの機体で戦っていたって言うんですの！？」

その言葉に先ほどの爆発とは違う衝撃が観客席の生徒たちを襲った。ISはパーソナルデータフィッティングに最適化されて初めて専用機足りえる。つまり一夏は白式という訓練機で戦っていたに等しい。訓練機と専用機では操作性が大きく異なる。しかし一同の驚愕も一夏には届いていなかった。

「まったく俺は・・・俺は世界で最高の姉さんをもったよ。俺も、俺の家族を守る。とりあえずは千冬姉の名前を守る！」

「ああもう、訳がわかりませんわ。もういいです、行きなさい！」
ミサイルを再装填した二機のビットが飛んでくる。その二機は切り札と言うことなのか、他の四機とは速度も軌道を変える反応性も違った。だが一夏は落ち着いた様子で雪片を振り、二機のビットを両断した。慣性によってビットが白式の後ろへ流れていき、爆ぜる。そして白式が爆発の衝撃を置き去りにしてセシリアへ突撃する。

「おおおおっ！」

一夏の裂帛れつぱくの気合により、雪片が輝く光を身に纏った。セシリアに

下段から上段への逆袈裟切りが迫る。

が、アリーナにブザーが鳴り響き、その一撃は決まることなく光を失った。

『試合終了。勝者、セシリア・オルコット』

勝者を告げる放送が流れると、セシリアは納得いつていない様子で、一夏は呆然とした様子でしばらく立ち尽くした後、第三アリーナのピットゲートへ戻って行った。

秋二と岡田は寮への道を歩いていた。ここまで来る間に交わした言葉は、「いきましよう」と「ここがグラウンドよ。あっちが更衣室になるわ」と「ここは学園内に三か所しかない男子用のトイレです。しっかりと覚えておいてください」だけだ。その後も二人は会話らしい会話もないまま、秋二がこれから入ることになる寮の一室の前にたどり着いた。

「ここがあなたの寮室になります。荷物は事前に届いていると思いますが、必要なもの、紛失したものがあれば本校舎二階の学生支援事務所に申し出てください」

岡田は未だに堅さの残る口調で言った。

「ここまでの案内、ありがとうございました」

秋二はそれだけ言っつて部屋に入ろうとするが、岡田から声がかかった。

「あの、彼、凄かったですね」

その声は小さく、単調だった。

「はい、凄すぎでした」

振り返って答える秋二の声も単調だった。

岡田は目の前の少年について知りえる限りのことを思い出していた。

ISランクがDで、最初に触れた時は気を失ったこと。二度目に起動させた時も、楽に動かせなかったこと。彼が在籍するクラスには特に留学生が多く日本人が少ないこと。

今度は織斑一夏について思い出してみる。

ISランクがBで、秋二と比べると楽にISが動かせること。専用機になっていない状態、それもIS搭乗時間は天と地ほど差がある状況で代表候補生に食い下がったこと。イメージインターフェースを搭載した武器（ISが第三世代機である証）の攻略法を見出した事（もつともこれは第三世代機の攻略法を見つけたというより、セシリアの攻略法を見つけたと言った方が適切だが）。試合の最初と最後では動きがまるで違ったこと。各国が無視できない織斑千冬や篠ノ之束博士と接点があること。

二人を比べると、よほど織斑一夏の方が恵まれていると岡田は思った。

「・・・がんばってね、秋二君。辛いことがあったら私に相談して。それでも昔は代表候補生だったんだから。これ、私の連絡先」

そう言っただけで笑むと、岡田はスーツの内ポケットに入っていた名刺入れから一枚取り出し、秋二に手渡した。

第一回モンドグロツソで総合優勝を勝ち取り、最強のIS操縦者の

フリュンヒルテ

称号を得た織斑千冬が日本代表でないのは、なにも実力が落ちたからでも、ISに乗れない体になっただけでもない。二年前の第二回モンドグロツソで決勝に進みながらも、諸事情から決勝戦の会場に現れなかったことの責任をとる形で引退したからだ。岡田、本名岡田かたゆうり優理は、当時突然空いた日本代表を決めるために広げられた代表候補生枠に入っていた。優理自身は自分が代表候補生の中で日本代表に最も遠い位置にいると思っていたが。

「ありがとうございます」

秋二は素直に名刺を受取ると、今度こそ部屋の中に入って行った。

秋二は部屋に入ると、窓側の壁にピッタリとくっつけられているベッドに横になった。入学手続きが終わった時には休みたいと思っていたが、今では一夏対セシリアの模擬戦が頭から離れなかった。

（織斑のニュースを見ていた時に力がなければ意味がないと考えていたが、本当に力が必要なのは俺の方じゃないか）

秋二は自嘲気味に笑った。

（岡田さんが言っていたのはああいうことか）

秋二は一夏対セシリア戦で途中から一夏が勝つ確率はないと考えた。勝てると思ったらビットが展開される前に突撃するしかない。だが実際には違った。もし突撃をかけていれば弾道型ミサイルのビットの直撃を受け、四機のビットに囲まれていただろう。そうなれば本当に勝つ確率はない。逆に一夏は勝利することを諦めず、粘り強く観察し続けることで勝機を見出した。

（俺に四方八方から隙をついて襲いかかってくるビットを落とせただろうか？織斑は一機目を破壊するとコツをつかみ、それ以降油断したときを除いて一度も攻撃に当たっていない。俺にそんな芸当ができるだろうか）

しばらくそんなことを考えていると、部屋が真っ暗になっていることに気がついた。

（しまった、夕食を食い損ねたな）

ポケットから携帯を取り出し、時間を確認すると七時二十分だった。IS学園の食堂は七時半に閉まってしまふ。広いIS学園、それもまだ道を覚えてもいないのに十分に食堂にたどり着けるわけもなく、どうしようかと考え、とりあえず手探りでベッドスタンドの電気をつけた。

（たしか購買は八時までやっていたはずだ。いつてみるか？）

育ち盛り的高校一年生が昼に動きまわった後夕食をとらないのはきつい。IS学園の学生便覧に確か地図が載っていたはずだと、それを探すために部屋の電気をつけた。その時、部屋に備え付けられて

いる内線電話が鳴った。織斑一夏がルームメイトでなければ、一夏以外女子しかいないこの学園でルームメイトはいないだろうし、第一ベッドは一つしかない。俺に何の用だ？と思いつながら受話器をとる。

「こんばんは、桐原秋二君。私は文部科学副大臣の宍道和人ししどうかずとというものだ。これからよろしく頼むよ」

それは秋二のまったく予期せぬ相手からの電話だった。

1 - 2 (後書き)

本文中にも感想のレスにも誤字が多い。反省します。
あと週一更新になるかもしれません。

「こんばんは、桐原秋二君。私は文部科学副大臣の宍道和人というものだ。これからよろしく頼むよ」

宍道のどつしりとした低い声を受話器から聞こえてくる。秋二は予期せぬ相手からの電話にしばしの間思考が凍った。

「・・・えっと、日本のですよね？」

よほど驚いたのか、最初に口から出たのは的外れな言葉だった。

「ああ、そうだと。私は日本の文部科学副大臣だ」

宍道はそれを気にしたふうもなく、大真面目に答えた。

「それで、今日はどうされたんですか？」

少しだけ落ち着きを取り戻した秋二が緊張を押し殺して最初の疑問をぶつける。昨日までは政府からの連絡や確認のために宍道がでてきたことはない。

「なに、たまたま手の空いているものがいなかったただけだ。以前に飛知和君をやったきりだったから、そろそろ直接話でもしておくべきだと思ってるね」

宍道は明らかに嘘とわかる言葉を堂々と口にした。

「まあそんなことはいいんだ。そろそろ連絡に入ろう。まず、要人保護の一環として健康診断をしたところ、桐原源蔵さんが軽度の脳血管性認知症ということが分かった」

「本当ですか!？」

秋二が噛み付かんばかりの勢いで尋ねた。秋二はここ最近源蔵の物忘れが激しかったことを思い出し、もつと真剣に考えておけばよかったと後悔した。

「大丈夫だ、安心したまえ。脳梗塞は小さいし、数が多いわけでもない。今後の食生活の見直しや適度の運動を心がけることで症状の

進行を防げるぐらいのものだ。症状が進行しそうであれば薬の用意もある。ご本人も君に知られるのが恥ずかしそうにしていたよ」

それとは対照的に落ち着いた口調で宍道は秋二をなだめた。

「そうですか・・・。宍道さんには申し訳ありませんが、祖父にお酒を控えるように伝えてください」

秋二は電話越しの宍道に軽く頭を下げると、文部科学副大臣にこんな事を頼んでいいものかと悩んだ末に、伝言をお願いした。

「気にすることはない。そのために電話を掛けたのだ、他にも今のうちに伝えておきたいことがあるればぜひ言ってくれればいい。相談でもかまわないよ」

宍道は軽く声を出して笑ったあと、さらに促した。

「ありがとうございます・・・では僕が元気でやっていると思えてください」

秋二は再び頭を下げると、ほんの少しだけ声を落として言った。考え事をする、一夏たちの戦いの光景が蘇ってきて、頭からなかなか消えない。秋二自身も気が付いていなかったが、確かに声が低くなっていた。

「どうかしたのかい。何か気になることがあったようだが、宍道が尋ねる。」

「・・・ええ、まあ、本日織斑君対セシリアさんの模擬戦を見たのですが、二人との才能の差を感じてしまっただけです。正直、まいつてますししばらく考えたが、秋二は肩の力を抜いて真情を吐露した。」

「なるほど。君は確かIS適性がDランクだったね。起動確認のとき、お世辞にも女子の一般レベルに達していなかったとか」

「はい、その通りです。ご存知かもしれませんが、僕はISの適性値が低く、基本動作やイメージインターフェースへのリンクそのものは悪くないものの、センサー精度やレーダーレベル、出力限界に

影響が出ているせいで全体的な性能が落ちているそうです」

秋二は眉根を寄せて苦々しそうに言った。

ISを構成する装置は、エネルギーの保存やメインCPUの役割を果たすISCコア、浮遊、飛翔のための反重力力翼や流動波干渉装置、パッシブ・イナージェル IS本体やその周囲の物体の慣性をなくしたような状態にするPICキャンセラー、高速戦闘や無慣性下での姿勢制御に対応できるようにする各種センサーなど多岐にわたり、センサー精度や出力限界が低いということは、おおよそ全ての装置に悪影響を与える。

「対応策は何か言われているかね」

「他のIS操縦者ではこうはならなかったことから、ISCコアに原因があり、搭乗時間や最適化処理フィッティングである程度の回復が見込まれると言われました」

「そうか。では君に朗報がある」

宍道の沈痛な声が、一転して明るい声に変わる。

「君に専用機が与えられることが正式に決まった」

秋二は息を呑んだ。部屋の中の静寂が深まった気がする。

「ISのことばかり質問し続けるのもしかして、と思いましたが、そうは言ったものの、秋二は驚きを隠せなかった。日本は代表候補生二人と織斑一夏を抱えている。さらに一機の専用機を用意する余裕などどこにもない。秋二は驚きのせいなのか、緊張のせいなのか、興奮のせいなのか、どれかはわからなかったが、早鐘を打つ心臓を押さえた。バクバクという音が耳にまで届く。」

「恥をさらすようだが、ISCコアの研究は実のところ何一つ進展していない。クリスタルのような何かで守られ内部構造は一切わからないし、様々な方面からアプローチをかけたが大きく反応を示すのは人が触れたときのみだ。そしてひとたび反応してしまえば外的な干渉はできない。せいぜいがフラグメントマップ（各ISがパーソ

ナライズによって独自に発展していくその道筋のこと。人間で言う遺伝子）や稼働状態を記録することだけだ。それも女性のデータはIS学園で日夜膨大な量がとられている。正直に言ってお手上げでね。

「いつそ男が使用した場合にどういった反応を示すのかというデータをとった方が建設的かもしれないということで、日本で研究に使っていたコアを専用機として渡すことになった」

「今まである意味定型文の一節のような言葉しか言わなかった宍道が、初めて焦れという感情を込め、本音を秋二に語った。

「人が触れなければ反応しないとされていて、宍道は兵器（それも銃やナイフとは比べ物にならないほど強大な力を持つとされるもの）に意思を持たせるのは正気の沙汰とは思えなかったからだ。」

「もつとも、現在日本はIS学園の運営や織斑一夏君と代表候補生の機体開発などで技術者も予算も足りていない。君に与えられるのは量産機になると思うが」

「いえ、十分すぎるぐらいです。授業は見学で、データ取りに毎日IS学園の日本研究ブースに行かねばならないと思っていましたから」

「秋二は自分のIS適性ランクでは授業の進行ペースについていけないと思っていた。訓練機では特定の機体に乗れることなどできないから、搭乗時間による最適化も期待できないし、正確なデータをとることもできない。それが最適化どころかパーソナライズまで可能な専用機をもらえ、研究所通いをしなくていいとあって秋二は素直に喜んだ。」

「君が日本の登録籍を持っていられるのは在学中の三年間だけだ。日本のためにも、その間にコアの性質だけでも解明しておきたい。学園内重要規約書の内容は覚えているかな？」

「宍道はさらに続けた。一応、宍道の言葉から嘘は感じられなかった。」

「はい。おおよそですが」

「それは良かった。では学園内でのISの取り扱いについての条項第二項は？」

「・・・“当学園の敷地内では許可なくISの全て、もしくは一部の展開を、同条項第七項に定める例外を除き堅く禁ずる。またこの規定に違反する者は、日本IS運用取締法第三十一条の八に従い罰を処する”」

秋二はしばらく考えた後、よどみなく答えた。ここは政府の指導員にも必ず覚えておくようにと念を押されていたため、暗記していた。

「その通りだ。しかし幸いにもその部屋は一人部屋で、今後も人が入る予定はない。・・・いくらIS学園が日本の運営する機関であったとしても、その条項を捻じ曲げることはできない。だから、私を許すな」

「・・・そうですね。広くてうれしいです」

秋二はその言葉から宍道の求める事と何か大きな決意を感じ取り、それだけを言った。

「それと学園生活で何かあれば、こまめにこの電話で一一七に掛けてくれ。時報が流れるが、無視して要件を言ってくれればいい。掛け直せるかわからないが、とりあえず秘匿回線で私に伝わる。まず外部に漏れることはない。安心してくれ」

これも白騎士事件後の技術の発展だ、と宍道は皮肉気に笑った。

「長々と時間をとってすまなかったな。今日はもう疲れただろう。」

私が言えた義理ではないが、明日からの学園生活に備え早く寝なさい」

「はい、ありがとうございました」

秋二がそう答えた後、宍道は電話を切った。

「早く寝なさい、か」

宍道はポツリと呟いた。とても小さな声で、広い部屋に溶けるように消えていったが、理恵は敏感に反応した。

「彼を騙すようで心が痛みますか？」

理恵をよく知らないものにはただ確認したように聞こえただろうが、その言葉には宍道を案じる気持ちが込められていた。机を挟んで、宍道と理恵が向かい合う。

「今更その程度のことは気にしない。彼が誠実な相手を信じたいというのならその気持を利用して、父性を感じさせる人物にはいい印象を持つというのなら父親を演じよう。」

秋二にはIS適性検査の一部として精神分析が行われた。もちろんそれは落ち着きだとかパニック状態に陥った場合の反応だとか、本当に検査としてのものであった。しかし、政府が秋二の思考パターンを把握しておくために行われたことも否めない。

その結果、秋二は過去イジメを受けていたことから誠実な態度を持つ相手を深く信じ、父親がいなかったことから父性を感じる相手には良い印象を持つ傾向があることが分かっている。

「ただわざとらし過ぎだと思ってな。私は聡志のようにできないらしい」

「そんなことないです！おじさんはお父さんの代わりに私をここまで育ててくれました！」

理恵が普段のクールな仮面を脱ぎ去り、激昂して机に詰め寄る。様々な思いが駆け巡り、目からこぼれ出そうになる。宍道はスーツのポケットから地味なハンカチを取り出すと理恵に渡し、顔をそむけた。

「お前はたまにそうなるな。普段から自分を殺しすぎだ。もう少し私に甘えればいい」

理恵は宍道の自然な気遣いに顔を緩めた後、交互に左右の目元を押

さえた

「恐縮です。ではまず桐原君のISにつける科学者ですが、人員が足りません」

理恵は再び仮面をかぶりいつも通りの口調で話を振ったが、赤くなつた目と頬のせいかな普段よりも柔らかい態度に見えた。

「研究員か……。しかし余裕のあるものなどいまい。秋二君のコア研究がなくなるわけではないからな。倉持技研は織斑君の専用機に掛かりきりで更識さいしきの専用機にも手が回せない状態だし、他の大手はイメージインターフェース搭載の第三世代型兵装の開発で手いっぱいだ」

理恵の振つた話題に乗ると、宍道は真剣な顔をした。宍道はなにも秋二に辛い思いをしてほしいとは思っていないし、できることなら何とかしてやりたいと思っっている。

IS部門において人手が足りないのはいつものことだ。突発的に現れた技術が多すぎて、篠ノ之博士が開示した程度の情報では理解どころか謎が深まる。なんともしようのない問題だった。

「他には？」

解決しない問題をすっぱりと切り捨てると、宍道は次を促した。

「アメリカからの留学生、アイリーン・ミラーさんですが、我々の予想とは違い日本人生徒と仲は悪くありませんでした」

「なに？報告書には相当日本を嫌っていると書かれていたぞ。どうなっている？」

宍道たちはアイリーンの報告書を読んだだけだが、日本を嫌悪しているとの文字に危惧を抱き、秋二がそのクラスに所属するとあつて現状の確認をさせていた。

「わかりませんが、そもそも彼女はアメリカでも実技、筆記ともに優秀な成績を収め、テストパイロット、ひいては代表候補生になるのは確実だろうと目されていたそうです。しかもIS学園に入学し

たのは政府の指示ではなく本人たつての希望となっています」

「本当に政府の指示ではないのか？」

「はい。昨日の報告ではそうなっています」

IS学園に入学できる者は国の後ろ盾がない場合幼いころからISについて学んできた者たちだけだ。大抵がIS学習のある小中学校に通い、IS学園を受験する。だが国家のテストパイロットや代表候補生は違う。いくら知識を持つとが国に実力を示すことができないければなることはできない。逆に実力を示せば、国はその人材を何としてでも得ようとする。

IS学園に在籍する生徒はあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。しかし本人の同意があれば、その限りではない。

IS学園に入学を許せば少なからず優秀な人材を逃すかもしれない。だからアイリーンの件には疑問が残った。

「くそつ、やはり日本は後手に回るしかないか」

宍道は悔しそうに爪を噛んだ。宍道の悪い癖だ。

「気分を入れ替えたい。このあとには何かあるか？」

「いえ、特にはありません。ですが明日官僚との意見交換がありますので、それに備えなければなりません。気分転換であれば私が缶コーヒーでも買ってきますが？」

理恵は手帳を開き記憶と間違っていないことを確認した後、宍道に告げ、資料のファイルの本棚から出す。

「いやいい。これを終わらせてからにしよう」

そう言うところ宍道は理恵から分厚いファイルを受け取り頭の中を整理していった。

秋二は一年三組の担任、緒方雪穂おがたゆきはの後について廊下を歩いていた。

すでにSHRが始まっているためか、廊下に人は見当たらない。周りの静けさと違い、秋二の心臓は緊張で高鳴っていた。

昨夜はとても疲れていたのか、あの後すぐに眠りにつけた。

「桐原君、そんなに緊張することないわ。うちのクラスは確かに留学生が多いけど、みんな日本語が堪能だし、はじめはうるさいだろうけどそのうち慣れると思うわ」

秋二の緊張を見てとった雪穂が話しかける。

「やっぱり女子だけっていうのは緊張しますね。馴染めるといいんですが」

秋二は乾いた笑いを浮かべると、胸を押さえるように二度叩いた。

「まあ、緊張するなと言う方が無理かもね。自己紹介のことでも考えているといいわ」

と言ってももう着くんだけどね、と雪穂は朗らかに笑う。秋二は進められた通り自己紹介を考えるが、英語で言った方がいいのか、ジヨークを交えた方がいいのか、と泥沼にはまっていた。

「じゃあ桐原君、ちょっと廊下で待っていて。私が入ってと言ったら入ってきてちょうだい」

「わかりました」

気がつけば一年三組の教室の前に着いていて、中からかすかに女子の声が聞こえるが、雪穂が中に入っていくとそれも収まった。

出席でもとっているのか、なかなか声がかからない。秋二には待ち時間の一秒が一分にも一時間にも感じられた。

「じゃあ入って」

ついに雪穂に呼ばれ、秋二は意を決して扉を開ける。その瞬間、女子たちの好奇の視線が彼に集中した。この場合女子とはクラス全員のことだが。

秋二のことはまだニュースに流れていない。雪穂からもクラスのメ

ンバーが増えるとしか説明されなかったのか、皆が一様に驚きの表情を浮かべている。

秋二はその視線にひるみながらも教卓の横に立った。

「桐原秋二です。皆さんにはわかりにくいかもしれませんが、日本人です。男ということで接しにくいかもしれませんが、よろしくお願ひします」

秋二は結局無難な自己紹介をした。横では雪穂が空中投影ディスプレイに桐原秋二きりはらあきうじと表示させている。クラスの女子はまだあっけにとられているのか、呆然としている。クラスを見渡すと、ブロンドの生徒と目があった。

背筋をピンと伸ばしていて、周りよりも背が高く見える。肩にかか
るぐらいの髪は、日本人が黒い髪を無理やりに染めた感じではない、
艶のある美しい金髪。切れ長の目できつい印象を抱かせる、冷徹な
美少女と言った感じだった。

彼女だけは周りにのまれず冷静な態度をしていて、仲良くなれそう
だと感じた。

「お、男？」

教室のどこからかそんなつぶやきが漏れる。

「はい、そうです。これからよろしくお願ひします」

秋二は余裕の態度を振るまい、つぶやきが聞こえた方に笑みを向け、
お辞儀した。

秋二が認めるとざわめきが生まれ、次第に大きく成長していく。

「はいはい、静かに。SHRが終わったらずくに授業よ。騒いでる
暇はないわ。お互いの自己紹介は放課中にでもしておきなさい。桐
原君は窓際が一番後ろに座って」

雪穂が真剣な表情で二度手をたたくと、ざわめきが消える。秋二が
横を通ると生徒たちは目を向けるが、しっかりと雪穂の連絡を聞い

ているようだ。秋二はまっすぐに用意されていた一番後ろの席に向かい座った。

「一限はPICについて。教科書の十六ページを開いて」

無駄口をたたく生徒が一人もないせいかわ、雪穂の声がよく響く。

秋二は机の中に手を入れ、職員室で説明された通りに入っていた教科書をとりだした。

「PICとは、物体の慣性をなくしたかのような現象を起こす装置で、本来オート制御で姿勢制御、加速、停止を行っている。だがマニュアルにすることでより細やかな動作をおこなうことができる。幸いISはイメージインターフェースを搭載しているから、機体制御を意識するだけで行うことができる」

雪穂がすらすらと教科書を読みあげる。そこで雪穂が教科書から顔を上げた。

「PICのマニュアル操作は役に立つのでしつかり聞いて。教科書には細やかな動作が可能になるとだけしか書いていないけど、オート制御では膨大な演算処理によってISコアの反応がわずかに遅れることがあるわ。でもマニュアル操作では常時送られ続けるイメージインターフェースの情報としてコアに処理させることで、コアの処理速度を上げることが可能になるわ。」

そうすると、加速開始や停止開始処理だけでなく、武器の高速交換やシールドの早期展開による理想的防御が可能となるの。

国家代表と代表候補生を分けることもある基礎にして重要な技能よ。一年生で使いこなせることはないと思うけど、代表を目指すなら習得すべき技能だから覚えておいて」

（なるほど、緒方先生は代表候補生だったことがあると言っていたな。先生の実戦経験に裏打ちされた戦闘知識はISコアとの適性値が低い俺にも役立つ。先生のクラスでよかった）

秋二は職員室での自己紹介を思い出し、生徒が静かになる理由に納得がいったと、他の生徒と同様にノートにポイントとしてそのことを書きこんだ。

「では次にP I Cの有効範囲だけど・・・」
授業は静かなまま流れるように進んでいった。

その後も授業は問題なく進み、放課中も様子を窺うというか、間合いを計るというか、誰一人として秋二に話しかけるものなく四限の授業も終わりに近づいてくる。

(き、気まずすぎる)

現在は日本の一般的な高校レベルの数学の授業で、幼い時から専門の学習をしている留学生たちはもちろん、高校の予習をしていた秋二にとっても簡単なため、秋二は授業もそこそこに自分を見つめる視線を感じていた。

ちなみになぜ一般的な高校数学をやるのかというと、I S学園が日本の高等学校として登録されているからだ。

その時昔ながらの授業終了の鐘が無慈悲にも鳴り響いた。

「ではここまでにします」

I S学園数学担当教員、エドワース・フランシスが授業の終わりを告げると、質量を持っているかのようなジツトリとした視線が増える。そのとき、一年三組では珍しい二人の日本人の生徒が秋二に向かってきた。

「あ、桐原君、緒方先生からの伝言で、君には専用機が与えられるので五六限目には出席しなくてもいいそうです。二時にI S学園東の日本の研究ブースに向かってください」

しかし二人の思惑はエドワースによってはずされた。

「専用機!? 一年生のこの時期に!?!」

秋二に向かって行った女子生徒二人のうち、一人が驚きの声を上げ

る。クラス全員が驚きに支配される。

「はい、わかりました。エドワース先生」

秋二が返事をする、エドワースは教室を出て行った。教室にはまた面倒なことになったと溜息をつく秋二と、未だに驚きの声を上げる生徒だけが残された。

さらに、二人目の男子生徒の噂を聞きつけた女子たちが教室の周りを取り囲んでいて、そこかしこから「織斑君の方がカッコよくない？」「いやこれはこれで」「私はもつと美形の方が・・・」「私はもつと・・・」と話し声が聞こえる。

IS学園は世界でここ一か所しかないが、この学園に入学するため
の事前学習としてIS学習を授業に組み込んでいる学校は多い。また
そんな学校は当然女子校で、本格的にIS学習をする学校は寮制
度を取り入れているところが多い。それ故、男はパンダがコアラの
ように生徒を引きつけてしまう。

（はやく学食に行って昼食を取らなければならないんだが・・・）
秋二はうんざりした顔で人垣を見た。そんなことを考えていると、
人垣の向こうから黄色い声があがる。今までとは違った類たぐいの声だっ
た。

秋二が気になって声の方向を見ていると、人垣をかき分けてさらな
る女子の集団を引き連れた織斑一夏が現れる。

「えっと、秋二でいいか？一緒に飯食いに行こうぜ」

「なに、一夏っ！お前は私と二人で昼食を食べる予定だっただろ」

「あらあら篤さん、私のことを忘れていらっしやいませんこと？」

秋二は女子生徒を連れ人垣を割って現れた一夏が、イスラエル人を
連れ紅海を二つに割ったモーセのように見えた。この機を逃すまい
と秋二は一夏のすぐ後ろで騒ぐ二人を無視して言った。

「ああ、秋二でいい。俺も一夏でいいか？」

「かまわないぜ、秋二。で、昼飯はどうする？」

一夏は右手を軽くあげて秋二に笑いかけた。

「ご一緒させてもらおう。よろしく、一夏」

「よし、じゃあ急ごう。今まで男子は俺一人だったからな、秋二が来てくれて助かったよ」

そう言うと、一夏はあげていた右手で秋二の左手を掴むと、食堂への道を駆けだした。

「俺もだ。クラスじゃ話すやつがいなくてな。・・・ところで、手は離さないか？」

後ろで女子たちが、

「きゃああっ！見て見て！ふたり、手つないでる!!」

「禁断の関係ね。いけるわ！」

と騒いでいるのを聞いて、秋二はそう提案する。

「なんでだ？まだ道分かんないんだろ？遠慮すんなって」

しかし天然なのか、わざとやっているのかわからないが、一夏は気にせずを手をつないだまま走り続けた。普通なら強引なヤツとでも思い距離をとったかもしれないが、秋二はなぜか大して気にならず、苦笑いを浮かべたままついて行った。

「ほら、ここが一年の学食だ。秋二って苦手なものないのか？」

学食はとても混んでいて、すぐには空いた席が見つからないほどだったが、一夏が四人分ぐらいの席はたぶんあると言うので先に昼食をとりに行くことになった（一夏の後ろで騒いでいた二人も一緒に食べることになったのだ）。

「見たことも聞いたこともない料理名が並んでるからな・・・。まあ、日本食なら大丈夫だ」

IS学園の学食は、留学生のために数多くの料理を取り扱っている。

食券を買ったための自動販売機も、ジュースのそれに比べてはるかに大きく、数があった。

「そうか。ならサケの塩焼き定食はどうだ？」

「ああ、それでいい。すまないな、学食なんて使ったことないから「気にすんなって。簡単だからすぐ慣れると思うぞ」

秋二は今まで小学校は給食、中学校は弁当だった。

「・・・一夏、私たちのことを忘れていないか？」

「・・・一夏さん、まず私たちを紹介することが当然でなくって？」先ほどからジト目で一夏を見ていた二人が低い声で言う。

「えっと、あなたなら知っています。イギリスの代表候補生、セシリア・オルコットさんでしたよね」

それを聞いた秋二はプラスチックの食券をカウンターに出した後、セシリアにむかって言った。セシリアは一瞬目を見開いたが、すぐに得意げな顔になり胸を張る。

「聞きました、一夏さん？これが当然の反応というものでしてよ」

「うっ、秋二、お前セシリアのこと知ってたのか？」

一夏は苦い顔をする。どうやら一夏はこの件で一悶着あったようだ。

「ああ、昨日の試合を見させてもらったからな」

そのことを聞くと、今度はセシリアが苦い顔になる。

「あ、あなた、昨日の試合を見ていらしたの」

秋二はおや、と思ったが、昨日の光景を思い出すと、セシリアはもつと花々とした勝利を望んでいたのではないかとあたりをつけた。

「一夏の動きや観察眼も凄かったが、セシリアさんの敵の回避先を読む戦術眼も凄かった。勉強になったよ」

秋二はとりあえず二人を持ちあげた。

「桐原さんと言ったかしら。そんなに気を使ってくれなくて結構で

すわ。あれは代表候補生として負けのようなものです」

しかしセシリアはそれが気に食わなかったのか、突っぱねるように言い放った。秋二はセシリアが完璧主義で、プライドが高い人物だと心の中に書き記した。

「それはすまなかったな。だが俺としては本当に凄いと思ったんだ」
秋二が改めてセシリアをほめたが、セシリアは慚然としたままだった。

「そうだぜ、セシリア。俺もお前のことは凄いと思った」
今度は一夏がセシリアをほめる。すると、不機嫌な様子だったセシリアが輝くような笑顔になる。

「本当ですか一夏さん!？」

「ん？本当だぜ」

あまりの違いに秋二の顔が引きつる。秋二は先ほど記したセシリアの欄の下に、わかりやすい、一夏に惚れていると書き込んだ。

「一夏、そろそろ私の紹介をしたらどうだ!」

「ちょっと待てよ箒、もうすぐ料理が来そうだから席に着いてからな」

箒と呼ばれた少女は見るからに不機嫌そうな顔を見ると、一人先に来ていた焼鮭定食を持って席を探しに行った。

（あちらが立てばこちらが立たずか。大変だな、一夏。まあ気づいてなさそうだが）

秋二は一夏の欄には鈍感と書き、箒を追う一夏の後をゆっくりと歩いて行った。

秋二の食事が終わったころ（一夏たちの微笑ましい会話には混じりにくかったので、一人だけ黙々と食べていた）、ようやく箒の不機嫌が収まったのか、自己紹介となった。

「それでは改めて。こっちが俺の幼馴染、篠ノ之箒だ」

しののけのひな

「筭だ。一年一組でクラスは違うが、これからよろしく頼む」

凜々しい顔つきで筭がいさつをする。お辞儀の仕方が様になっていて、武道をたしなんでいるのかもしれないと思った。

「桐原秋二です。こちらこそよろしく。あの、違っていたら謝りますが、篠ノ之博士の関係者ですか？」

秋二はふと気付いたことを口にする。

「・・・姉だ。だが私はあの人とは違う。特に教えられることはない。私を呼ぶ時は筭と呼んでくれ」

筭はそれだけ言うと立ち上がり、食器を片づけに行った。

(そうか、博士の妹ということは何も無いはずがない。考えなしだったな)

「悪いな一夏。また彼女の機嫌を損ねてしまつて。俺はこの後専用機の受け渡しがあつて日本の研究ブースに行かないといけないんだ。すまないが先に行く」

そう言うと秋二は食器を持って立ち上がった。

「いや、こつちこそ誘つとして悪かつたな。俺も一年一組だから、気軽に遊びに来てくれ」

「ああ、遊びに行く。またな」

秋二はそう言つて右手を挙げたあと、まずは研究ブースの場所を知るために自室の学生便覧を取りに行った。

1・3(後書き)

もっとがんばります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8928y/>

US アンリミテッド・ストラトス

2011年12月3日16時52分発行